

1987年から・・・

太田隆士

1987年に駿河台大学が発足するときに就任して、はや退職の日を迎えることになった。大学が創立されることを経験できたことも貴重な思い出である。

当時、諸大学では〇〇センターの設立がブームとなっていたが、学部から切り離されたセンターなるものは、大学教育にとって何であったのであろうか。どのような高校生を獲得し、授業し、社会に送り出すかというプロセスにかかわってこそ、実りある教育となるのであり、そこから分離した教員組織は、所属する教員にとっても、学生にも、そして大学という教育組織にも有益なものではないのではなかろうか。

そうした風潮のなかで、単一学部として出発したこともあるが、全ての教員が学生の入学から卒業まで関わるまさに教育的な場に身を置けたことは幸せなことであった。しかし学部増設を重ねるなかで様々な不都合も生じていた。例えば各学部が有している教員財産を他学部に閉じていたことである。極めて有効である全学部共通の導入教育・教養教育を実現するために、当時の教務部長が尽力なされた。やっと総合大学らしくなることができた。その後を継いで教務部長の職に着いたときには、同一キャンパスでありながら学部により異なっていた期末試験の実施方法を共通化するという残された課題に取り組み、解決することができた。これだけのことで大変な労力を要することであった。

新しい大学としての魅力にも溢れていた。他大学にはなかった「海外語学演習」の現在の方法をドイツ語グループとして提案し、実現したことである。一時は一年に約100名の学生が短期留学することもあった。ウィーン大学に短期留学した学生

総数は約250名になる。しかしドイツ語グループとしてのこの提案も、当初は賛同する他の外国語がまったくない状態からのスタートであった。また長期留学ではミュンヘン大学と交換留学制度を締結することができ、両大学からそれぞれ約30名にのぼる学生が留学してきた。ドイツ語教員の同僚が粘り強く交渉してミュンヘン大学の寮を一定数確保できたこと、またその同僚をはじめ本学をミュンヘン大学の卒業生が今でも訪ねてくれることは、誇れる大きな財産であろう。

1994年からは、一年間ウィーン大学で在外研究させて戴けた。世紀転換期のウィーン研究がライフワークであり、そのために H.v. ホフマンスタールと K. クラウスという伝統に相反する姿勢をとる二人の作家に焦点をおき、調査・研究できた。ブルク劇場にも通い『むずかしい男』や『人類最期の日々』等の舞台を見ることができ、研究に邁進できた幸福な日々であった。やはりウィーンという都市に家族とともに身を置いて初めてわかることも多々あった。そのときに知り合ったウィーンの人たちとの交流は今でも続いている。

退職後は「無一物中無尽蔵」の心持ちで研究に精進したいと希望している。そして駿河台大学が創立当初の志をもち、良い教育機関であり続けることを祈念している。